

# ナナ・クワメ・アジェイ＝ブレニヤーの『フライデー・ブラック』にみる現代アメリカの人種主義と暴力

庄 司 宏 子

## 序

Nana Kwame Adjei-Brenyah の2018年のデビュー作 *Friday Black* はアフリカ系アメリカ人の若者が体験する日常的なレイシズムを描く短編集である。アジェイ＝ブレニヤーは1991年に生まれ、ニューヨーク郊外のロックランド郡スプリングヴァレーで育った。彼の両親はガーナからの移民であり、父が語るアナンシ物語や母が口にするファンテイ語を耳にし、自身はガーナに行く機会はなかったもののガーナの口承文化を身近に感じていたという。<sup>1</sup> 『フライデー・ブラック』に収録された物語は、ストリート、ショッピングモール、テーマパークなど日常的な空間で起こる暴力をテーマとする。現代アメリカ社会に巣くう人種的暴力を拡大鏡で増幅するように描出したその小説世界は、ディストピア的近未来社会の趣を湛える。『フライデー・ブラック』に収録されたいくつかの短編に即しながら、アジェイ＝ブレニヤーが描き出す人種的暴力の諸相と、そうした暴力を生み出す根源とは何か、以下に見ていきたい。

## 1 “Shopping While Black?” —— 「フィンケルスタイン5」にみるアフリカ系アメリカ人に対する人種規制と日常的レイシズム

### (1) エマニュエルによる「黒さ」の調整

『フライデー・ブラック』の冒頭を飾るのは“The Finkelstein 5”という短編小説である。主人公の Emmanuel Gyan は父母と暮らす黒人青年で、物語の冒頭、彼は Fela という首のない黒人少女の夢をみる。フェラは、サウスカロライナ州にあるフィンケルスタイン図書館の外で、George Wilson Dunn という白人男性によって殺害された「フィンケルスタイン5」と呼称される五人の黒人の子供のうちの一入である。「フィンケルスタイン5」という物語のタイトルは、1989年4月にニューヨークのセントラルパークでジョギング中の白人女性を襲撃、レイプしたとして告訴された五人の黒人とラティーノの少年を表す「セントラルパーク5 (“Central Park 5”)」とその冤罪事件との連想を意図したものと思われる。<sup>2</sup> ダンによる子供たちの殺害はチェーンソーで首を切り取るという残忍なものであったが、白人のみで構成された陪審員たちによる裁判で彼は無罪となる。評

決理由は「子供たちは図書館の外をうろつき、図書館の中で生産的な市民に期待される読書をして  
いたわけではなく、被告のダンが五人の黒人の子供たちを脅威と感じたことはもっともなことで、  
車からフォートテックプロ 18 インチ 48cc エンジンのチェーンソーを取り出して彼自身と彼が図書館  
から借り出した DVD と彼の子供たちを守ろうとしたことは、十分に彼の〔正当防衛の〕権利の範  
囲内にある」(2) というものであった。

物語は、自分の濃い茶色の肌色を意識するエマニュエルの日常と、フィンケルスタイン 5 事件  
の裁判場面を並行させ、交互に提示しながら進む。エマニュエルの一日は、起床してまず自分の  
“Blackness” を調整することから始まる。彼は幼い頃からの父の教えもあって、「怒っているときは  
微笑み、叫びたいときには囁く」(4) と、白人社会でトラブルを避けて生きるため、自らを律す  
る習慣を身につけている。その習慣が、表情や声、服装による「黒さ」の調整であり、彼は自分の「黒  
さ」をデジタル的に 1 から 10 までの数字として表現する。例えば、彼が職を得たいと思っている  
ヴィンテージのセーター専門店の面接担当者との電話による会話では 1.5 の「黒さ」で話し、面接  
では 4.2 の「黒さ」に抑えることのできる服を探しにモールに向かう、という具合である。エマニュ  
エルは、自分の「黒さ」の数字をなるべく低く抑えることが白人社会で生きる方法だと考えている。  
「黒さ」の数字とは、黒人の存在が白人の心理に恐れや警戒心として認識される度合いであり、い  
わば人種的恐怖指数である。作者のアジェイ＝ブレニヤーはインタビューで、エマニュエルによる  
「黒さ」の調整は、黒人の肌色を犯罪や脅威と結びつけ、ステレオタイプの偏見を抱く白人中心の  
アメリカ社会で、多くのアメリカ黒人が日常的に行っていることだと語っている。<sup>3</sup> エマニュエル  
による「黒さ」の調整は、アメリカ黒人が自分の存在が白人に脅威と映らないよう、「白人のよう  
に振る舞う (“act white”）」日々のサバイバル術であり、黒人の若者が実践するデジタル時代の「パッ  
シング」といえるだろう。

ダンに対する無罪評決が出た翌日、エマニュエルは亡くなったフィンケルスタイン 5 への「ほん  
やりとした結束を表す行動」(3) として、ルーズフィットのカーゴパンツ、黒のフーディ、グレー  
のスナップバックの帽子にスニーカーという、「黒さ 7.6」の服装で外出する。エマニュエルはバス  
停で人々が不安そうに自分を眺め、財布を彼から遠ざけるのを意識する。エマニュエルはバスのな  
かで旧友の Boogie に出会う。白いシャツと細い黒のネクタイで「黒さ 2.9」というすっきりした出  
で立ちのブージーは、ダンに対する無罪判決のあと、黒人の若者の間で広がっている “Naming” と  
いう活動に関わっていると言い、今こそ団結が必要だとエマニュエルに参加を呼びかける。「ネー  
ミング」とは、黒人の若者グループによる白人への襲撃を意味する。洒落た格好をしたこの若者グ  
ループは、ダンによって殺されたフィンケルスタイン 5 の名前を唱えながら、出会った白人を暴行  
し殺害していた。ブージーと分かれ一人で向かったモールでは、案の定、警備員に尾行され、店で  
はしてもいない窃盗を疑われる。さらに遠回しに黒人であることを理由に就職の面接を門前払いさ  
れると、最初は躊躇っていたエマニュエルは、バットを手に「ネーミング」に参加する決意をする。  
ブージーの仲間と共に白人男女のカップルを襲ったとき、エマニュエルは自分の「黒さ」が高揚し

て10に上昇するのを感じる。駆けつけた警官に撃たれたエマニュエルが、最期の意識のなかでフィッセル・スタイン5の幻影を見、自分の「黒さ」が零に急降下するのを感じる瞬間に物語は幕を閉じる。

「フィッセル・スタイン5」では、主人公のエマニュエルがモールや雇用で受ける日常的な個人レベルのレイシズムから、白人男性によって殺害された無実の黒人の子供たちが「五人の怪物」(25)とされ、被告に無罪判決が与えられるという、司法の場での制度的レイシズムまでが描かれている。日々「黒さ」の数字を調整しながら生きるエマニュエルと、そうした調整をアフリカ系の若者に強いるアメリカ社会の人種偏見に訴えて無罪を勝ち取るジョージ・ウィルソン・ダン——両者は物語のなかで交錯することはないが、共に同じアメリカの人種的環境のなかで繋がっている。

エマニュエルがモールで窃盗を疑われ警備員に尾行されるという体験は、「黒さ」が「7.6だとモールに入ると直ちに三人の警備員が尾行を始め、… 穏便な5.0だと一人だけついてくる」(11)、レイシャル・プロファイリングの慣行として、警官による呼び止め尋問(“stop-and-frisk”)と同様に、多くの黒人男性が日常的に経験していることである。<sup>4</sup>しかし、エマニュエルが日常的に体験するレイシズムは、モールでの警備員の尾行のような、あからさまで目に見える形のものだけではなく、また「黒さ」の調整という個人的な努力によって解消されるものでもない。現在のアメリカにおいてレイシズムとは、特定の個人が行うものというより、ブラック・ライブズ・マター運動など最近の人種正義運動の戦いにみられるように、警察や司法などの法執行機関、医療、住宅、雇用をめぐる政策や慣行、教育、メディア、また資本主義と異性愛家父長制度(cis-heteropatriarchy)といった多方面におよぶ制度が、互いに結びつきながら現れる。そうした制度を通じたレイシズムは、言葉、コミュニケーション、特定の服装のなかに巧妙にコード化されて日常の場に浮上する。そうした制度的レイシズムの状況、あるいは制度的レイシズムが司法やメディアを通じて作動する様子を次にみてみたい。

## (2) フーディの政治性——スティグマか特権か

「フィッセル・スタイン5」から見えてくる現代のアフリカ系アメリカ人のアイデンティティとは固定的というより、場面ごとに演じられる流動的なパフォーマンス・アイデンティティであるが、この短編小説ではそのパフォーマンス・アイデンティティにとって服装が決定的な要素であることが描かれている。服装はエマニュエルにとって自身の「黒さ」を調整するうえで重要な構成要素であると同時に、公権力によるレイシャル・プロファイリングの対象ともなる。エマニュエルは、アメリカ社会において若い黒人男性である自分がその時その場で何を着ているかが生死に関わるという、人種と衣服にまつわる決定的な人生の教訓を中学生のときに学ぶ。動物園のギフトショップでパンダのぬいぐるみを盗んだと疑われた彼は、だぼだぼのジーンズが嫌疑の理由だと知り、家の庭でジーンズを焼く。高校生になる頃にはエマニュエルは自身の「黒さ」を衣服によって上下させながら、何を身に纏うかによって自己と社会との関係を調整・交渉し、コントロールしようとする。エマニュエルにとって衣服の選択は、職を得るため、仲間への忠誠心や団結心を示すための自己演出や自己表現であるが、

何より自分の「黒さ」が白人の目に「脅威」と映り危険な状況を招かないようにするための、生死に関わることである。

しかし、エマニュエルが服装で自分の「黒さ」の数字を安全な1から危険領域の10の間で調整するとは、服装とはそれを選択し着る側の主導的なコントロール下にあるものではなく、それを見る社会の側による「黒さ」に関わる人種的有徴性がすでに織り込まれていることを意味する。そのことは、フィンケルスタイン5を殺害した被告の白人男性ジョージ・ウィルソン・ダンの行為が正当防衛と認定される裁判の場で示される。五人の黒人の子供たちが彼にとって「脅威」であり、彼が自分の身を（それに自分が借り出したDVDと二人の子供も）「守らなくては」と感じるに至ったのは理にかなったこととして、彼が法廷で陪審員に正当防衛を印象づける根拠となるのが、子供たちが「自分に向かって叫んだ」、「五人が皆、強盗をはたらくように黒い衣服を着ていた」（16、強調引用者）という彼の主張である。陪審員たちは彼の言葉に感じ入り、頷く。白人優位のアメリカ社会において、ある種の服装は強く黒人の連想を呼び、犯罪性と結びつけられることで隠微なレイシズムの媒体となっている。司法制度においてもそれが再現・確認されることを小説のこの場面は提示する。

近年、「黒さ」の有徴性を示すものとして、フーディほどその人種的含蓄が取り沙汰された服装はないだろう。フーディを着た黒人男性は、レイシャル・プロファイリングの対象となりやすい。上記の裁判シーンでは、五人の子供たちがフーディと想定される黒の服を着ていたことが被告の正当防衛の根拠となることが描かれている。五人の服装がフーディであることは、彼らを思う団結心からエマニュエルが「ながらく着るのを止めていた黒のフーディを取り出し、そのトンネルのような筒に身を通す」（3）という行為により補強されている。裁判の場で、五人の黒人の子供たちは着ていたフーディによって「ギャング」（16、17）とされる。その一方で、ダンの子供思いのシングルファーザー、勤勉でまともな白人キリスト教徒であると陪審に印象づける。作者のアジェイ＝ブレニヤは作中の「黒のフーディ」に関して、2012年にフロリダで起こったTrayvon Martin射殺事件を下敷きにしていることは明らかだろう。マーティンを銃で殺害したGeorge Zimmermanが警察への通報の際に、マーティンの服装を問われ「黒っぽいフーディ、灰色のフーディ」（Weeks）と答えたことから、フーディと人種や犯罪との連想が注目を集めることとなる。“Stand Your Ground” lawを規定するフロリダ州では、顔を覆い隠すフード付きセーターを着て夜歩く黒人少年を怪しい危険人物として脅威を感じ、発砲することを正当防衛だとする考えがある。そういう考えでは「マーティンがフーディを着ていたことが彼の死の原因」とされた（Castellanos）。事件以降、以前からあったフーディを「不良、チンピラ（hoodlum）」と結びつける見方が流布し、フーディは人種と犯罪の新たな記号として可視化されることになる。同時に、トレイヴォン・マーティンにジャスティスを求め、ジマーマンを無罪とした判決に異議を唱える人々は一斉にフーディを纏って抗議活動をした。

トレイヴォン・マーティン事件を介して増幅されたフーディと人種的スティグマの結びつきは、

アメリカにおいて、人種偏見がフーディというごくありふれた服装を通じて引き起こされるという、最近の事例を示している。

頭に被るフードをセーターに付けたカジュアルな衣服をフーディと呼ぶようになるのは1990年代であるが、フーディの前身は1930年代に寒い時期に外で働く労働者やスポーツ選手のために作られた防寒着である (Patterson)。1970年代には映画『ロッキー』でシルベスター・スタローン演じる主人公がトレーニングでフーディを着るシーンは、映画のテーマである不屈の精神のイメージを元白人労働者階級のために作られたこの服に付け加える。1980年代にはヒップホップの台頭のなかで有名ラッパーやスケートボーダーがフーディを纏うようになると、フーディのイメージはスポーツウェアからストリートウェアへと変化していく。最近ではシリコンバレーのIT企業で働く男性社員がフーディを職場の標準服とする「フーディ・カルチャー」が登場し、それが同僚の女性たちを「トライブ」からはじき出す現象が報じられ、フーディはIT企業の男性中心主義やセクシズム的な体質を映し出すものとなる (Groth)。フーディは、それを特定の個人や集団が纏うことで、その周りに人種のみならず階級やジェンダーの差異の構造を顕在化させる特性があるといえるだろう。

フーディの政治性を考える上で、トレイヴォン・マーティンとマーク・ザッカーバーグによるフーディ着用ほど顕著な例はないだろう。二人のフーディ姿は、どのような場所でどのような人種的身體がこれを纏うかによりこの衣服の意味合いが如実に変わることを示し、フーディを介して差異の政治性が浮かび上がる最も深刻な事例となった。

トレイヴォン・マーティンがジマーマンによって射殺された事件から数か月後の2012年5月、フェイスブックの26歳のCEOマーク・ザッカーバーグは自社の新規の株式公開に先立ちウォールストリートの銀行家や投資家との会合にフーディを着て現れる。そのあまりにカジュアルで“I don't care”のメッセージを放つ出で立ちは、金融街の面々を苛立たせ、アメリカ西海岸のシリコンバレーの新興企業対アメリカ東部の伝統的な金融市場の文化戦争のごとき事件——“Hoodiegate”として、ニュースメディアやSNSで取り沙汰された (Lester)。若者らしい反抗心とも未熟さとも映るザッカーバーグのフーディ姿は、フェイスブックの新規上場のニュース価値を高めるため計算された企業家の戦略であることは確かである。無難な背広姿でウォールストリートに現れたなら、彼のキャラクターもフェイスブックの企業イメージもそれほど鮮烈な印象を与えることはなかっただろう。マーティンとザッカーバーグ——奇しくも同じ年に、それぞれのフーディ着用が目された二人の若者の服装が放つ記号性は、極端に、そして絶望的なまでに、異なっている。二人が着用したフーディはそれぞれにメインストリームのアメリカ社会からの逸脱を表すが、白人ザッカーバーグのフーディは新興企業経営者の勢いと力を表すのに対し、黒人トレイヴォン・マーティンのフーディは犯罪性や脅威の表象となる。両者の違いを生み出すのはフーディにあるのではなく、どのような人種や階級の属性をもつ身体がフーディを纏うのかを眼差すアメリカ社会の側にある。ザッカーバーグの若さと富と白人性はフーディを金融界の既成体制に対峙する武器とするが、マーティ

ンの黒人性はフーディに白人の人種的無意識が捏造する「黒人犯罪者」の虚構像を充填させてしまう。フーディを纏った人間の肌の色や年齢、ジェンダー、社会的位置、どの場所にその姿が現れるかという人種・階級・場所のインターセクショナリティとそれに向けられる社会の視線は、フーディを特権ともスティグマともすることを両者の姿は示すこととなった。

### (3) “thug” とは誰か

「フィンケルスタイン<sup>5</sup>」が描き出す現代アメリカ社会に織り込まれた人種的コードはフーディのような服装にとどまるものではない。特定の言葉もまた人種によるコード化がなされていることを物語は示している。それは、アメリカ社会において人種的規制がいかに日常の様々な領域に入り込んでいるかを垣間見させる。そうした言葉の例として“thug”を取り上げてみたい。物語では、五人の子供を殺害したダンの無罪判決が出て以降、町では黒人の若い男女のグループが五人の子供のうち一人の名前を連呼(“Naming”)しながら出逢った白人を襲撃、殺害するという事件が起こり始める。ファッショナブルな服装をして殺人を行う“Nammers”の姿は、ニュースで「かつてアフリカから渡来した人々の子孫とおぼしき悪党(“a gang of thugs, all of whom seem … to be descendants of the African diaspora”）」(9)と報じられる。<sup>5</sup>小説では「悪党」の原語は“thugs”であるが、この語は近年アメリカ社会で間接的にアフリカ系を指す「人種的負荷を帯びた単語(“a racially charged word”）」として、その用いられ方が議論されている。

“thug”は元々「インドの幹線道路で追い剥ぎ強盗を行う犯罪グループ」を意味するヒンドゥー語であり、インドを植民地化したイギリス人を経由してアメリカ英語の語彙に入ってくる(McWhorter)。1990年代にはヒップホップのスター Tupac Shakur が“Thug Life”と腹部に入れ墨をすると、彼のファンの中で、“thug”の語のステッカーが用いられるようになる。しかし、この語が政治的・社会的な注目を集めるのは、2015年に西ボルチモアの刑務所に拘置されていた黒人青年が暴行を受けたことに対する地元黒人住民の抗議活動に対して、当時のオバマ大統領、メリーランド州知事、ボルチモア市長がともに抗議参加者を“thug”と読んで批判したことによる。地元から連邦まで3人の政治家が揃って黒人プロテスターを“thug”と呼んだことは、この語の使用が人種的なニュアンスを伴いながら、明確な政治的意図のもとに現代アメリカ社会で流布していることを示している。ジョン・マクウォーターはそのニュアンスについて「うわべを取り繕った婉曲的なNワード」(“thug today is a nominally polite way of using the N-word”)だとする。そうした共通理解があるため、この語の使用に対する批判が起こり、黒人層を重要な支持基盤とするボルチモア市長(市長は黒人女性である)は謝罪している。

Stephens-Dougan は、政治家が“thug”の語を用いることに関して、その目的や意図されている効果とは「人種的距離(“racial distancing”）」であるとして、次のように説明する。ステイーヴンズ＝ドゥガンによると、公的な場でのNワード使用が政治的死を意味するようになった公民権運動以降、政治家は異なる方法で有権者や支持基盤に対して自分の人種的立場を表明しようとするよ

うになったという。その方法のひとつが、“thug”のような直接的には特定の人種的・民族的マイノリティを意味しないものの、彼らを暗示する言葉を演説に用いることであり、そのような言い回しによって人種的に中庸か、もしくは保守的な白人有権者層に向かって、民主党の政治家の場合は自分の政策は人種の現状（白人優位体制）を転覆するものではないこと、共和党の政治家の場合はより強く人種のヒエラルキーを強固にする政策を実行するというメッセージを伝えるものであるという。今日、人種・ジェンダー・政党を問わず多くの政治家が、こうした表面上は人種に言及しない語や表現を用いながら、暗黙に人種的なシグナルを送る手法を用いており、これを「人種の距離」と呼ぶ（Stephens-Dougan 7-9）。「犬笛」（“dog whistle”）と同様な、コード化された言葉を通じて人種的アピールを行なう政治的戦略である。

ダンが無罪とする裁判で、検察官が陪審員に向けて最終意見を述べる場面には、現代アメリカの人種をめぐる状況が映し出されている。「ダンの同類」（2）と表現され、全員が白人の陪審団に向けてなされる、人種は不明だが女性検察官による論告では、現代のブラック・ライブズ・マター運動に参加する若い世代の感情と共振するような言葉が使われている。検察官は、五人の被害者の名前の連呼（“chanting”）しながら司法制度がレイシズムの温床ではなく「正義」となるような評決を陪審に訴える。「私は善と悪との間には違いがあると愚かしくも信じています。私が愚か者ではないと示してください。そして五人の子供たちの親たち、正義を求める彼らは愚か者ではないと示してください」（23、強調引用者）と、女性検察官は陪審団に向かって殺害された五人の黒人の子供たちへの正義を訴える。彼女の言葉に対し、トランプ時代の白人郊外居住者を彷彿させる陪審団は何の反応も示さない。また女性検察官の言葉は、黒人被害者への正義を訴える言葉ではあるが、その表向きの言葉とは裏腹に、その行為を「愚か者」のそれに等しいと「犬笛」的に伝えるようでもある。検察官は最初から勝つつもりのない裁判をしているのか、もしくは人権派を装いながら陪審と同類の人物なのかとも疑える。こうした裁判場面の描写に、作者アジェイ＝ブレニヤーは黒人被害者と司法制度との間にある隔たり、シニシズム、不信感を滲ませていると解釈することができる。

被告に無罪判決がなされる裁判では、五人の黒人の子供たちの命は、白人男性が図書館から借り出したDVDにも及ばないというがごとくで、司法や裁判がアフリカ系アメリカ人にとって必ずしも正義をもたらすものではない現実を映し出している。法廷は人種的正義の場にならないことを知ったエマニュエルを含む黒人の若者たちは、たまたま出逢った白人を殺害する“revenge killing”の行為に及ぶ。物語の最後、フィンケルスタイン5の一人、Fela St. Johnの名前を呼びながら落命するエマニュエルには殉教者のイメージが重なる。

アジェイ＝ブレニヤーは、この短編執筆の契機となったのは、2012年2月26日にフロリダ州サンフォードで起こったジョージ・ジマーマンによる17歳の黒人少年トレイヴォン・マーティン射殺事件であったと語っている。アジェイ＝ブレニヤーは事件が起こった当時、大学生であったが、事件は彼と仲間の学生たちにとって“a tipping point”のように思われたという。アジェイ＝ブレニ

ヤーは仲間と 500 部ほどのパンフレットを作ってキャンパスで配布したが、それは学生に人種差別への抗議活動を喚起することもなく、またパンフレットは無署名か、またはフェイクネームで書いたものであったため、自分の名前を付けて事件を記したいという思いがあったという。マーティンの事件が「フィンケルスタイン 5」の執筆につながったことについて、文学は即問題解決とは至らないが、「本質的な問いかけとなる (“acts like an essential question”）」のだと語っている (“Nana Kwame Adjei-Brenyah: Friday Black” 00:04:57-06:52)。

「フィンケルスタイン 5」で主人公のエマニュエルを死に至らしめ、殺人者ジョージ・ウィルソン・ダンを無罪放免とするのは、アメリカ社会のさまざまな方面に染みついている制度的レイシズムと呼ばれるものであり、それは直接的には陪審による司法制度である。しかし、現代アメリカのレイシズムは司法など制度的なものにとどまらず、フーディのような衣服や “thugs” などの言葉に見られるように、日常的ではあるが見えにくい領域にも浸透していることを物語は描き出す。そうした現代アメリカ社会の各所に織り込まれた人種コード化は、黒人若者を犯罪と結びつける人種偏見を再生産し、新たな人種規制となり抑圧構造となっている。「フィンケルスタイン 5」は、そうしたアメリカ社会の人種をめぐる隠微な暴力を描き出している。

## 2 「獐猛な人間」——「フライデー・ブラック」にみる消費資本主義の暴力

### (1) フライデー・ブラックの魔神

『フライデー・ブラック』の表題作である “Friday Black” は、作者アジェイ＝ブレニヤ自身 16 歳から大学卒業の頃まで Lowe’s Home Improvement で働いていたため、よく知っているショッピングモールが舞台となっている。彼はモールでの仕事を通じてアメリカ人の獐猛な消費行動とその物欲に潜む暴力を目撃し、資本主義が何であるかを学んだという。とりわけアメリカ人のショッピングにまつわる暴力はブラックフライデーのセール日に顕著で、人は自分のサイズのセール品をつかむためには倒れている人の頭を踏みつけることも平気であったという。短編「フライデー・ブラック」はブラックフライデーのセール初日が売り子の視点から捉えられているが、アジェイ＝ブレニヤはこのセール日を物語の舞台としたことについて、消費することはアメリカ人の DNA のようなもので、モノを所有することが「特権」に転化し、消費資本主義経済とそこに現出する暴力は広くアメリカ社会と文化に波及していると述べている (“Nana Kwame Adjei-Brenyah: Friday Black” 00:14:10-40)。それはどのようなものか見てみよう。

「フライデー・ブラック」の語り手は、プロミネントモールにある「ポールフェイス」という衣料品店で働いて 4 年目の業績ナンバーの売り子である。店はブラックフライデーからクリスマスまでの 30 日間に、100 万ドルの売り上げを目標としており、ナンバーワンの売り上げを達成した者は店にある好きな商品の一つ、コミッションとしてもらえることになっている。店は語り手に期待しており、彼は店で一番高価なスーパーシェルというパーカーを母へのプレゼントにしようとして狙っ

ている。

語り手に次いで売り上げを期待されているのがデニム担当の Duo で、語り手はデュオが「デニム売り場を生き延びる (“survive”) だろう」(105) と思う。売り子たちにとって、ブラックフライデーは文字通り生死に関わる日である。このセール日には客は「饕餮な人間 (“ravenous humans”）」と化して吠え、商品を奪い合い、踏みつけられて死亡する者も出る。昨年のブラックフライデーには129名の死者が出ており (108)、語り手やデュオほど有能ではない売り子のランスとミシェルは死体の片付けを担当する。語り手がナンバーワンの売り子である理由は、彼は客が発する「ブラックフライデー語」を理解する (“I can speak Black Friday. Or I can understand it, at least” [106]) ため、それにより客が欲する商品ですぐさま手渡すことができる。ほとんどの客はブラックフライデーのセール日にはまともな言葉遣いができず、単語を羅列するだけの「ブラックフライデー語」でしか意思表示できない。語り手はこうした断片的な単語から、客が求めている商品やそのサイズがわかるのみならず、客がそれを欲しが理由、その家族構成や関係、内に抱える感情までを理解する。例えば、「青、息子、スリークパック！」(106) という客のブラックフライデー語は「息子用に青色のスリークパックが欲しい」という意味であるが、語り手はさらに、息子は普段は離婚した妻のもとで暮らしているが、クリスマスには彼の所にやって来て二人だけで過ごすので、息子がほしがっている唯一つのものをプレゼントすることで父親らしく振る舞いたい、という気持ちを読み取る。客が片言しか話せなくなるのは、彼らを買物に駆り立てる物神「フライデー・ブラック」がその精神に取り憑いているためである。スリークパックを買うことで息子の愛情と父親らしさを手に入ようとするとこの客のように、ブラックフライデーには、昇進のため、クラスの人気者になるため等々、モノを買うことで欲求実現させようとする客が押しかける。

「フライデー・ブラック」が頭に取り憑いた客 (“the Friday Black in their brains” [114]) は売り子や他の客に噛みつき、生死を賭けて望みの商品を手に入れようとする。物語のタイトルの「フライデー・ブラック」とは、人を狂ったように消費に駆り立てる魔神であり、この魔神はアメリカ社会の消費資本主義そのものである。この根源的暴力のもとでは加害者と被害者の線引きはない。モールで売り上げ一位を誇る語り手は加害者でも、彼にモノを買わされる客は被害者でもない。アメリカ消費主義の暴力「フライデー・ブラック」が支配する世界では、加害者と被害者の線引きではなく、凄惨なセールの場を生き抜きモノを手に入れる強者と、手に入れることができず、ときには命まで失う弱者がいるだけである。語り手は、夫と娘と一緒にセールに来ていた女性にフードコートで会う。女性は手に入れたばかりの新しいコートを着てひとりで昼食を食べている。家族はまだショッピング中なのかと問う語り手に、女性は “Dead … She was weak. He was weak. I am strong …” (112) と答える。語り手は昼食用に買った二つのバーガーの一つを彼女に手渡す。

優れた売り子である語り手も勝者ではない。語り手は時給8ドル50セントの最低賃金で働き、2ドルのバーガーセットで空腹を満たす労働者である。四人家族の家庭は貧しく、失業した母と父との間では口論が絶えない。感謝祭のご馳走もない。彼は今年もナンバーワンの売り子として手に

入れた500ドルのジャケットを母親にプレゼントし、「永遠の愛情の証」(108)に変えようとする。客もまたブラックフライデー以外にはハイビジョンテレビを購入することはできない階層に属し、彼らはセール品で「幸福を買い、家に持ち帰る」(111)。売り子も客も、ともに社会の下層におり、そういう彼らがアメリカの消費資本主義を支えている。

## (2) 言及されない人種

この物語では、語り手の名前や彼の人種に関わる言及が一切無く、客についても同様な言及はほとんどなされない。「フィンケルスタイン5」ではMboya、Akua、Felaなどアフリカ系を示唆する名前の人物が多く登場するが、それとは対照的に、「フライデー・ブラック」の登場人物たちは、語り手の名への言及はなく、売り場主任のAngela、ポールフェイスの地域管轄者のRichard、語り手の同僚の売り子のLance、Michel、Duoなどヨーロッパ系の名前が用いられているが、彼らの人種に関する言及はなされない。“Friday heads”と表現されるブラックフライデーにやってくる客の人種もまた描写されることはなく、彼らはただ金を落としていく「頭数」にすぎない。語り手が客のブラックフライデー語を理解するようになったのは、初めてのブラックフライデーのとき、コネティカットからやって来た男性客に腕を噛まれた後であった。語り手はこの能力の獲得を、客のブラックフライデー語が自分の体内に入ったのだらうと、感染のメタファーで語る。この物語の暴力の根源は、ウイルスのように人から人に感染する「フライデー・ブラック」として表現されるアメリカの消費資本主義であり、その暴力は、ウイルスがそう振る舞うように、人種に関わりなく伝染する。消費資本主義の暴力が人種と結びついたとき、どのような世界が出現するのか、それを「ジマーランド」のなかに検討してみたい。

## 3 商品化される人種——「ジマーランド」にみる人種資本主義の暴力

### (1) 人種的テーマパーク

“Zimmer Land”<sup>6</sup>は大人のための同名の体験型テーマパークを描く短編小説であるが、そこで提供される娯楽は日常を忘れさせるものではなく、日常に潜む暴力を土台に成り立っている。前章で取り上げた「フライデー・ブラック」と同じく、「ジマーランド」も現代アメリカの消費資本主義を描く点で両作品は通底している。「フライデー・ブラック」では人種は重要なカテゴリーとして表面に現れないが、「ジマーランド」では必要不可欠な要素となっている。このテーマパークに設置された“Cassidy Lane module,” “Work Jerk module,” “Terror Train module”といったモジュールは、アメリカの日常生活で起こりうる危機的状況をシミュレーションしたもので、客は危険を疑似体験し、楽しみながら対処法を探するという趣向である。「キャシディ・レイン・モジュール」は、郊外の白人住宅地キャシディ・レインを再現したモジュールで、客は家の敷地内に入り込んだアフリカ系の侵入者に対し、どのように身を守るか学ぶ。「ワーク・ジャーク・モジュール」は、会社のオフィ

スで同僚の誰が金を着用しているかを探し出す。「テラー・トレイン・モジュール」では、テロを実行しようとする三人のイスラム教徒が乗車する列車で、どのように被害を最小に収めつつ助かる方法を見いだすかを体験学習するというものである。

主人公の若い黒人男性 Isaiah (愛称 Zay) は、キャシディ・レインのモジュールで住宅地に侵入する不審者を演じる仕事をしている。彼の同僚でインド人とアイルランド人の混血である Saleh は、テラー・トレインでテロリスト役のイスラム教徒を演じている。それぞれのモジュールの売りは「腸はらわたで体験する (“visceral engagement”）」ことである。

ゼイのモジュールにやって来る客は大抵中年の白人男性である。侵入してきた不審者への対処として、客は警察への通報、BB 銃、素手という三つの選択肢から一つを選ぶが、ゼイが不審者を演じるとき客の 84% は銃を選ぶ。防護服のメカスーツに身を固めたゼイは、客に銃で撃たれ、スーツの下に血糊の入った袋が弾けて血を出しながら倒れる。そこへ警官二人が駆けつけ客を尋問し、客は正当防衛を主張して無罪を勝ち取るというストーリーが付いている。ゼイが担当するモジュールを体験した客は、黒人青年を銃殺する疑似体験に興奮し、それを正義の執行と思い、中毒的リピーターになる。黒人男性を犯罪者、イスラム教徒をテロリストという偏見に基づく体験テーマパークに対して抗議が起こる。人種偏見を商品にしたテーマパークで働くゼイの車には卵が投げつけられ、“Christopher Coonlumbus” (91) (彼自身はこのなじり言葉を面白いと思う) と書かれた抗議ビラが毎日のように貼られる。恋人の Melanie も「なぜ魂のない仕事をするのか」(92) と彼を批判する。しかし、彼は「裏切り者 (“a sellout”）」と言われようとも現実に一人の子供が殺されるよりも、自分がテーマパークで 1000 万回も 2000 万回もフェイクで銃殺される方がましだと考え、こうしたテーマパークが現実を変えていく契機になるかもしれないとも思っている。

## (2) 商品となる人種

ジマーランドの設立者で CEO は Heland Zimmer<sup>7</sup> という。ウォールストリートで働いていたジマーはオルバニーでソーシャルワーカーに転じ、低所得家庭で虐待や育児放棄を受けている子供の救済や元麻薬常習者の住宅援助に関わり、ジマーランド経営はこれまで培った社会連携や福祉活動のさらなる促進であると述べる。ジマーランドのミッションは「安全な場所で問題解決・正義・判断を追究する」、「制御された極限状態で自己を知る」(95) とあるが、その実は教育や福祉、セキュリティの娯楽ビジネス化であり、彼の頭には世界中の投資家から金を集め、新たなモジュールを設立し、客の再訪率を上げて収益を増大させることしかない。そのため「双方向的正義演習」として、学校を舞台に誰が体育館に爆弾を仕掛けるテロリストかを見つけ出す新しいモジュールをつくり、ジマーランドを子供にもオープンにしようとしている。

ゼイは自分が担当するモジュールでの銃撃は正義とは関係ないとして、客が銃撃以外の選択ができるよう改革案を提案するが、最も収益を上げるキャシディ・レインでの客の最大の楽しみが銃撃と知っているジマーはこれを変えるつもりは毛頭ない。むしろジマーはこのテーマパークを子供に

も開放してさらに儲けようと考えている。もちろんゼイも、彼のところに来る白人男性の客の大半は「ただ何度も繰り返し〔若い黒人男性を〕殺す」(98) 擬似体験ゆえにモジュールに来るリピーターであるとわかっている。あまりに何度も彼を撃つためにやって来るので「ほとんど家族同然」(102) の客もいる。

「ジマーランド」が提供する娯楽は人種に関するアメリカ白人のステレオタイプに基づくファンタジーであり、そこで供される娯楽に人種は必要不可欠な商品となっている。ゼイが黒人の若い男であることは彼のモジュールに客を引き寄せる最大のインセンティブであり、ジマーランドではそこで働くゼイやサレハの人種はテーマパークを構成する商品として組み込まれている。

ジマーランドでは、人種が商品化された消費資本主義アメリカの縮図であるが、人種の商品化は娯楽モジュールにとどまらない。内部からテーマパークの改革を目指すゼイは新しいモジュールの企画書を書き、昇進する。会社の「創造的企画会議 (“creative team”）」のメンバーになったゼイは初めて参加する会議のとき、10時と伝えられた会場に30分以上も早く到着する。「自分が着席した後で皆が着席するようにして、誰もが自分の存在に気づくように」(93) するためである。しかし彼がドアを開けるとすでに会議は始まっており、メンバー全員がいたずらをした子供のように彼を見ておし黙る。会議の開始時間を間違っゼイに伝えたのはゼイ以外にこの会議で唯一の黒人メンバーでジマーの右腕の Doug であった。会議でゼイの改革案に真剣に耳を傾ける者はいない。ゼイの昇進や企画会議メンバー入りは、ジマーランドが会社として人種の機会均等や多様性の社風をもつという演出のための飾りであることが示唆される。これはネオリベラル時代の企業戦略である “woke capitalism” であり、そこで実践されているのは個人のアイデンティティの搾取であり、人種の商品化である。<sup>8</sup>

経営者ジマーは、ゼイのかつての恋人でジマーランドの人事担当として働くメラニーを恋人としている。その理由は、白人である彼が黒人の恋人を持つことは、「消費者に人種差別主義者と受けとられる可能性を20%減じることができるというフォーカスグループによるマーケティングリサーチの報告」(94) のためだろうとゼイは考える。メラニーの人種はジマーの会社に投資を呼び込み、利益を生み出す。ここにも人種の商品化が現れている。

ジマーランドは世界中からの資本投資で経営され（ジマーはカボヴェルデからの投資の交渉に当たっている [101]）、さまざまな人種や民族をバックグラウンドとする人々が働く現代のグローバル企業を思わせる。ジマーランドが提供する商品は、白人が抱く人種差別や偏見の上に成り立つ娯楽であり、ゼイやメラニーの人種は利益に転換される人種資本主義が具現化した世界が描かれている。そこでは労働者の「人種」は雇用の条件であり、それは「付加価値」となって企業に利益をもたらすとともに、新たな搾取の形態を生み出している。

### (3) 現代アメリカの人種資本主義

Cedric Robinson は、1983年の著書で資本主義社会の発展と拡大は人種主義の方向に進み、人種

主義が資本主義に伴って出現した社会構造に染み込んだとして、これを“racial capitalism”と呼んだ(2-4, 81)。資本は著しく不平等な人間関係をつくり出しながら、その間を動くことによるみ自らを増幅させる。資本主義は人間の能力不平等のフィクションをつくり出し、人種主義はその要請に合致した。保守主義のみならずリベラリズムや多文化主義もまた人種資本主義と相性がよく、これらのイデオロギイは国家主導の資本主義の統治秩序に叶うよう人間のあいだに価値の差異と優劣を配置するという(Melamed 77)。

Nancy Leong は、現代の人種資本主義に関して、白人や圧倒的に白人主導の組織が有色人から価値を引き出す人種的搾取が顕著に表れる場として、人種に基づくアファーマティブアクションと人種別割当制の雇用を挙げる。人種的マイノリティの人間が平等機会の徴として、多様性のアピールのために入学や雇用を許可される時、そこで起こっているのは人種の商品化であるという。<sup>9</sup> リオンは、人種ゆえに大学や会社に入るとき、ひとは自分の人種的アイデンティティを売っているのだという。自分のアイデンティティを売り渡してしまえば、あなたは大学や会社の要請に応じて人種的サービス、人種的パフォーマンスをしなくてはならなくなる。年鑑や会社のウェブサイトが多様性の統計のアピールのための人種的演技を求められるときがそれだ。そのとき、あなたの人種的アイデンティティはもはやあなたのものではない。あなたの人種的アイデンティティを握るのは大学であり会社である。あなたより権力をもつ彼らは、髪型を含むドレスコード等さまざまな手段と機会を通じて差別、強制、規制をしかけてくるだろう(Leong 37)。<sup>10</sup>

人種の商品化を解除し、人種資本主義の幽門狭窄から自由になり、人種的アイデンティティを再び自分のものとする事は可能なのだろうか。その答えは直接的には示されないが、日々モジュールで白人客を相手に黒人の悪党を演じ、企業ジマーランドの人種資本主義に絡め取られているゼイが、変革を起こそうと行動を開始するところで物語は幕を閉じる。ゼイは白人常連客に対していつものように挑発の言葉を投げつけ、客が銃を取り出したとき、あえてパワースーツのスイッチを入れずに対応しようとする。あらかじめプロトコルで定められ、考量された暴力の想定範囲に収まらない事態が起こりうる状況を彼は意図的に作り出す。「人間を変えることはまだ可能だ」(102)と思いつながら。

エマニュエル・ウォラーステインは、「人種」は資本主義的世界システムのなかで作られ出されたカテゴリーだと論じる。世界システムのなかで世界規模の労働分業が起こり、資本主義システムはその拡大過程で、可能なかぎりの労働力を手に入れようとする。労働力は商品をつくり、さらなる資本が生み出され蓄積される。資本の蓄積を最大にするため、労働力コストなど生産にかかるコストを最小にしようとする。これを実現する方式が人種主義であった(Wallerstein, “The Ideological Tensions of Capitalism” 33)。資本主義こそは人種主義を生み出すシステムであり、「人種」の境界は流動的だが、常に「ニガー」となる人々が存在し、もしこの役割をする黒人がいないか数が足りなければ、「ホワイトニガー」がつくりだされるという(34)。大量に無賃の、あるいは安価な労働力を必要とした初期資本主義では、そうした労働力を集中的に提供する地理上の場所を「人種」と

結びつけた (Wallerstein, “The Construction of Peoplehood” 383)。そのあとに肌の色を口実にする人種主義がつくりだされる。

ジマーランドで客が購入するものは機能や使用価値を有するモノではなく、白人優位のレイシスト的ファンタジーであり、人種で記号化されたシミュラクルの世界である。イメージや記号を消費する後期資本主義の世界を映し出すジマーランドでは、商品化された暴力が繰り返され、その商品に特別な価値を付与する人種もまた再生産され続けている。

## 結

Jodi Melamed は、現代のネオリベリズムの社会では、国家の機能は金融化され私有化され商品化され、その政治的経済的統治に人種的暴力も合流するとして、「国家—金融—人種的暴力」の三者の構造連結を示す。そのように連結した構造は、私企業が経営する刑務所での大量拘置や移民労働者の搾取、人種間の争いなどの現象として現れているという (77-78)。<sup>11</sup> Ta-Nehisi Coates は、アメリカ白人を “Dreamers” と呼ぶ。アメリカ黒人は、かつては奴隷として、現在は安価な労働力として、その肉体はアメリカ白人に富を生む「投資」であり「天然資源」であったが、今なおアメリカの「白人という夢 (虚構)」に資金調達をしているという (132)。アメリカン・ドリームという無垢神話は、その過程で黒人に加えられてきた人種的暴力を隠蔽する装置となってきた。ナナ・クワメ・アジェイ＝ブレニヤが『フライデー・ブラック』のなかで描出したストリートやショッピングモール、テーマパークといった日常的空間に立ち現れる人種的暴力は、コーツが論じるアメリカの姿と共振している。その物語は、言葉や衣服、人種のステレオタイプをなぞる娯楽を通じていかに新たな人種規制や抑圧構造が生み出されるかを描き出す。彼の物語を読むとき、読者はブラック・ライブズ・マター運動の現代アメリカで起きている人種をめぐるさまざまな暴力の目撃者となるのである。

※本論文は、2019 年度長期研修 (海外) の成果である。

## 註

<sup>1</sup> 2019 年秋に行われた『ワシントン・スクエア・レビュー』のクワ・アシュンによるアジェイ＝ブレニヤへのインタビューより (Ashun)。

<sup>2</sup> この事件では、捜査におけるレイシャル・プロファイリングや、人種差別的な裁判や報道が問題となった。同時に、この事件ではニューヨークの不動産業者であったドナルド・トランプが特定の白人層の代弁者として注目を集めることになり、後の政界進出のきっかけともなった。トランプは事件直後の 5 月 1 日に容疑者として拘束された 10 代の五人の少年たちに死刑を求める「死刑を復活せよ、警察を復活せよ」と題した署名入りの広告を *New York Daily News* などニューヨークの主要四紙に出した。裁判が始まっていない段階で出された広告には少年たちの氏名、電話番号、住所が記され、少年たちの命を危険に晒すこととなった。2002 年に犯人の告白と DNA 鑑定で五人は無罪となり、誤認逮捕、不当起訴と人種的な意図による権利剥奪が認定され、4,100 万ドルの和解金が支払われた。トランプは自身の行為について謝罪することはなく、

- 2016年の大統領選の最中に「まだ五人は有罪だと信じている」と改めて主張した (Graham et al. 55-57)。
- <sup>3</sup> アジェイ=ブレニヤーは『ニューヨーク・タイムズ』のルース・ラ・ファーラとのインタビューで、「成功、機会、身の安全のため（「黒さ」の調整は）極めて重要だ」と語っている。ラ・ファーラはこの行為を“racial coding,” “sartorial profiling,” “dialing one’s racial profile up or down,” “form of self-profiling”という言葉で表現している (La Ferla)。
- <sup>4</sup> 例えばコルソン・ホワイトヘッドはNPRのインタビューで、高校生のとき小売店で警官に手錠をかけられ警察車のなかで尋問を受けたことがあり、「私はその場で警官が見つけた唯一の黒人、あるいはおそらく最初の黒人のティーンエイジャーだったのだろう」(Whitehead)と自身の経験を語っている。
- <sup>5</sup> “Namers”たちが一様にファッショナブルな格好をしていることは、1960年代のキング牧師らによる公民権運動から現代のアフリカ系の人々による運動に至るまでの人種正義運動で、参加者が“Sunday best”を着るという伝統を意識するものであると考えられる。同時に、現代のフーディに代表される特定のカジュアルな服装をアフリカ系アメリカ人と結びつけ、暴力や犯罪の連想を付着させる最近の傾向に対する抗議の意図があると思われる。
- <sup>6</sup> 「ジマーランド (Zimmer Land)」のZimmerという名前については、2012年のTrayvon Martin事件で銃を発砲しMartinを殺害したGeorge Zimmermanにちなんでいると思われる。
- <sup>7</sup> Heland Zimmer という名は註6で記したGeorge Zimmermanを想起させるほか、Helandから彼の経営する人種的モジュールからなるテーマパーク、またこのテーマパークが体現する消費資本主義に潜む男性中心主義的で性差別的な体質が感知される。
- <sup>8</sup> OEDは“woke”という語が“alert to racial and social discrimination and injustice”の意味で用いられた最も早い例として1962年の用例を挙げている。Merriam-Websterは“stay woke”が“social awareness”を意味する決まり文句となるのは、2008年のErykah Baduの歌“Master Teacher”によるものとする (“Stay woke”)。“Woke capitalism”とは、企業が人種的正義や社会的正義の抗議運動に関わったり、そうした活動に熱心な活動家を広告に起用するなどして、企業イメージを上げ、顧客を拡大し、売上げや株価を上げたりすることをいう。
- <sup>9</sup> 多様性のリベラルな価値とその社会実践に潜む人種主義と人種の商品化について、Alfred L. Martin, Jr.は「良質なテレビドラマ」を謳うテレビ番組に関して、「白人の俳優がメインのドラマに黒人俳優が一人いることは『多様性』であるが、数名の黒人俳優が常に出演するドラマはブラック・ショーである」という「語られることのないテレビ業界の常識」を述べている。
- <sup>10</sup> アジェイ=ブレニヤーは、職場で専門家らしい服装を求められることについて、“I think so much of professionalism is coded racism”と述べている (“Nana Kwame Adjei-Brenyah: Friday Black” 00:10:05-20)。
- <sup>11</sup> Katherine McKittrickは、人種に関わる空間的配置と暴力の青写真としてプランテーションは今も存続しているという。そして産獄複合体 (“prison industrial complex”)は現代のプランテーションだとする (1949, 955)。Rebecca EvansはDonna Harawayによる“Plantationocene”の概念を用いて、現代の地球規模の気候変動と環境大災害の根本原因である「石油採取資本主義」 (“extractive petrocapi-talism”)の起源はプランテーションであると(447)。そしてかつてのプランテーションの跡地につくられている石油化学工場、軍の施設、水産加工工場、核実験場、クラウドサーバー倉庫などに見られるモノカルチャーの資源収奪論理のなかにプランテーションの構造インフラ的暴力が継続しているという (466)。エヴァンズは今なおアメリカ南部に漂うプランテーションの“geomemory”を現代に描く小説としてJesmyn Wardの*Sing, Unburied, Sing* (2017)とColson Whiteheadの*The Underground Railroad* (2016)を挙げている。

### 引用文献

- Adjei-Brenyah, Nana Kwame. *Friday Black*. Houghton Mifflin Harcourt, 2018.
- Ashun, Kukuwa. “Interview with Nana Kwame Adjei-Brenyah.” *Washington Square Review*, issue 44, fall 2019, [www.washingtonsquarereview.com/new-page-48](http://www.washingtonsquarereview.com/new-page-48).

- Castellanos, Dalina. "Geraldo Rivera: Hoodie Responsible for Trayvon Martin's Death." *Los Angeles Times*, 23 March 2012, [www.latimes.com/nation/la-xpm-2012-mar-23-la-na-nn-geraldo-rivera-hoodie-trayvon-martin-20120323-story.html](http://www.latimes.com/nation/la-xpm-2012-mar-23-la-na-nn-geraldo-rivera-hoodie-trayvon-martin-20120323-story.html).
- Coates, Ta-Nehisi. *Between the World and Me*. The Text Publishing Company, 2015.
- Evans, Rebecca. "Geomemory and Genre Friction: Infrastructural Violence and Plantation Afterlives in Contemporary African American Novels." *American Literature*, vol. 93, no. 3, 2021, pp. 445-72.
- Graham, David A., et al. "An Oral History of Trump's Bigotry." *The Atlantic*, June 2019, pp. 52-63.
- Groth, Aimee. "The Subtle Sexism of Hoodies: Women in Silicon Valley Have No Idea What to Wear to Work." *Quartz*, 7 Jan. 2016, [qz.com/569025/the-subtle-sexism-of-hoodies-women-in-silicon-valley-have-no-idea-what-to-wear-to-work/](http://qz.com/569025/the-subtle-sexism-of-hoodies-women-in-silicon-valley-have-no-idea-what-to-wear-to-work/).
- La Ferla, Ruth. "You Are What You Wear." *The New York Times*, 28 Nov. 2018, [www.nytimes.com/2018/11/28/style/nana-kwame-adjai-brenyah-friday-black.html](http://www.nytimes.com/2018/11/28/style/nana-kwame-adjai-brenyah-friday-black.html).
- Leong, Nancy. "Reflections on Racial Capitalism." *Harvard Law Review Forum*, vol. 127:32, 2013, pp. 32-38. [https://harvardlawreview.org/wp-content/uploads/pdfs/forvol127\\_leong.pdf](https://harvardlawreview.org/wp-content/uploads/pdfs/forvol127_leong.pdf).
- Lester, Tracey Lomrantz. "Hoodiegate 2012: Mark Zuckerberg's Signature Sweatshirt Ruffles Feathers on Wall Street." *Glamour*, 15 May 2012, [www.glamour.com/story/hoodiegate-2012-mark-zuckerber](http://www.glamour.com/story/hoodiegate-2012-mark-zuckerber).
- Martin, Alfred L., Jr. "Notes from Underground: WGN's Black-Cast Quality TV Experiment." *Los Angeles Review of Books*, 31 May 2018, [lareviewofbooks.org/article/notes-from-underground-wgns-black-cast-quality-tv-experiment/](http://lareviewofbooks.org/article/notes-from-underground-wgns-black-cast-quality-tv-experiment/).
- McKittrick, Katherine. "On Plantation, Prisons, and a Black Sense of Place." *Social and Cultural Geography*, vol. 12, no. 8, 2011, pp. 947-63.
- McWhorter, John. "The Racially Charged Meaning Behind the Word 'Thug'." *NPR*, 30 April 2015, [www.npr.org/2015/04/30/403362626/the-racially-charged-meaning-behind-the-word-thug](http://www.npr.org/2015/04/30/403362626/the-racially-charged-meaning-behind-the-word-thug). Transcript.
- Melamed, Jodi. "Racial Capitalism." *Critical Ethnic Studies*, vol. 1, no. 1, spring 2015, pp. 76-85. *JSTOR*, [www.jstor.org/stable/10.5749](http://www.jstor.org/stable/10.5749).
- "Nana Kwame Adjei-Brenyah: Friday Black." *YouTube*, uploaded by WheelerCenter, 9 May 2019, [www.youtube.com/watch?v=NGY1TBPasCQ](http://www.youtube.com/watch?v=NGY1TBPasCQ).
- Patterson, Troy. "The Politics of the Hoodie." *The New York Times*, 2 March 2012, [www.nytimes.com/2012/03/06/magazine/the-politics-of-the-hoodie.html](http://www.nytimes.com/2012/03/06/magazine/the-politics-of-the-hoodie.html).
- Robinson, Cedric J. *Black Marxism: The Making of the Black Radical Tradition*. 1983. U of North Carolina P, 2000.
- "Stay woke." *Merriam-Webster*, 2022 Merriam-Webster Incorporated, [www.merriam-webster.com/words-at-play/woke-meaning-origin](http://www.merriam-webster.com/words-at-play/woke-meaning-origin).
- Stephens-Dougan, Lafleur. *Race to the Bottom: How Racial Appeals Work in American Politics*. U of Chicago P, 2020.
- Wallerstein, Immanuel. "The Construction of Peoplehood: Racism, Nationalism, Ethnicity." *Sociological Forum*, vol. 2, no. 2, spring 1987, pp. 373-88. *JSTOR*, <https://www.jstor.org/stable/684478>.
- . "The Ideological Tensions of Capitalism: Universalism versus Racism and Sexism." *Race, Nation, Class: Ambiguous Identities*, edited by Etienne Balibar and Immanuel Wallerstein, Verso, 1991, pp. 29-36.
- Weeks, Linton. "Tragedy Gives the Hoodie a Whole New Meaning." *NPR*, 24 March 2012, [www.wyso.org/2012-03-24/tragedy-gives-the-hoodie-a-whole-new-meaning](http://www.wyso.org/2012-03-24/tragedy-gives-the-hoodie-a-whole-new-meaning). Transcript.
- Whitehead, Colson. "Colson Whitehead's 'Underground Railroad' Is A Literal Train To Freedom." *NPR*, 18 Nov. 2016, [www.npr.org/2016/11/18/502558001/colson-whiteheads-underground-railroad-is-a-literal-train-to-freedom](http://www.npr.org/2016/11/18/502558001/colson-whiteheads-underground-railroad-is-a-literal-train-to-freedom). Transcript.